民俗芸能の心

舞うが如く 翔ぶが如く

――奥三河の花祭り――

生命が甦る世界

高橋秀雄
日本伝統芸能研究所長

大きな湯釜からゆらめきあがる湯煙りを通して、若者たちの舞う姿が眼に映る。夜も更けわたり、山々のはざまは漆黒の闇に沈んでいるが、そこだけがにじむように明るい。

笛と太鼓が人をいざなうように夜のしじまを縫い、人々のざわめきも聞こえてくる。

そこは「花祭り」の舞処。迎えられた神々とともに人々は舞う。まさに、“舞うがごとく翔ぶがごとく”……。

陰暦霜月。日毎に寒さが肌を刺すようになり、冬が山から里へと降りてくる。木々の葉が枯れて風に散る。物のすべてが衰える季節である。昔の人々は、その姿に生命が衰弱し、眠り、果ては魂が離れ去る恐れを感じた。その生命を再び呼びさまし、新しい魂を付与しようとして、人々は神に祈った。霜月に行われるところから、霜月神楽と呼ばれ、また、釜に湯をたぎらせて舞う形式であるので、湯立神楽とも称される。

長野県、静岡県と県境を接する愛知県の奥三河地方、俗に三・信・遠といわれる地域の山間の集落に、「花祭り」が伝えられてきている。かつては天龍川をさかのぼった大入河、振草川沿いに点在する二十余りの集落で行われていたが、いまは十数カ所になっている。

この「花祭り」の里では、この神楽をハナと呼ぶ。花を招びこもうとする人々の切なる心の発露が感じられる。

ヘンベと呼ばれる力強い足踏みをするが、これは反閇という陰陽道の呪法の一つで、地下の邪気を退散させる意味を持っており、この湯立の神楽には修験の行法の性格が強く感じられる。

素面の舞、仮面の舞、鬼の舞と続けられる神楽は一昼夜を超えて続けられる。

古い神祭りの形式をいまに伝え、その祭りの中で、神と人とが和合する祈りの世界が生き続けているのが、奥三河の「花祭り」なのである。

トヘテオ トーヘ
テオトヘ トーホ
トーホヘ トーホ
トヘテホ トーヘ

と、群衆の囃し立てとともに乱舞は廻る。

花祭りは宮入りから始まる。村（豊根村下黒川）の神社から地主神を会場の花宿へと運ぶ。

釜の御水は村の滝から滝祓い（東栄町足込）をして、お水迎えをする。

天の祭り（東栄町足込）は、花宿の２階に75のお膳を供えて屋敷神を招く。

式三番の舞（豊根村下黒川）

〈演出メモ〉

大島善助(映画監督)

翌日の夕ぐれ、祭り終って村人達は無病息災を願って家路をたどる。

奥三河は、すべて山の中である。その花祭――永遠の生への願いが「祭」を通して表現される。花が咲き、実を結び、実は新しい生命へと生まれかわっていく。それは花に神が宿っているからだと古代の人々は考えていた。この日本人の心のドラマが「舞」となってくりひろげられていく。

本作品では、ふれることができなかったが、ヨーロッパ各国の民間信仰の伝統的、歴史的な祭と全く軌を一にしていて面白い。

ヨーロッパの祭というとキリスト教を主体とした復活祭や謝肉祭などがすぐに連想される。しかし一方で、民間信仰が根太くはりめぐらされていて、いまなおさかんなのである。

その一つにオーストリアの「ペルヒトの行列」がある。ゲンマン信仰であるこの民間信仰は、12月21日から1月6日(花祭は11月から1月)までの夜を「十二夜」とか「荒い夜」とか称して、この期間、あらゆる悪霊が現れ、嵐の夜には魔王が軍勢をひきいて空を荒れ狂い、地下からは死霊が群れをなしてはいあがってくると信じて、恐れられている(花祭ではこの悪霊をヘンベという力足をふむ舞で地下に封じこめる)やがて道化役の死神・ボーダンに続いて「美しいペルヒト」が登場する(花祭では翁や巫女が仮面をつけて舞う)やがて「醜いペルヒト」が鈴の音をひびかせながら走りまわる(花祭は鈴と扇)付けている仮面の目は大きくひらき、口はさけ、無気味な牙をむきだしにしている(花祭では山見鬼、榊鬼などだが、日本の鬼は醜くなく優雅でさえある)「醜いペルヒト」はわがもの顔で暴れまわる。そして見物人の中にわけ入り、誰彼の区別なく、もっているホウキで、逃げまどう人々の足をはらい、体を打つ。「醜いペルヒト」が恐ろしい姿をして暴れまわるのは、この時期に現れるという悪霊(花祭の冬と同じ)に勝つためのポーズであり、打ちおろすホウキに打たれるのは、病気にならないためのおまじないなのである(花祭では湯ばやしとなる)キリスト教は人間が制御できない大宇宙の諸力を神の意志によって統一されると主張していたが、農民や漁民など常に大宇宙を相手とする人々の恐れを否定することができなかった(日本では天ッ神と国ッ神の相剋となろうか)「ペルヒトの行列」はザルツブルクの西方、ドイツとの国境に近い山村、ザンクト・ヨハン・イム・ポンガウ村の祭(奥三河もまた山の中、発祥も同じあの中世)。

稚児による花の舞(東栄町足込)舞いながら激しく体を屈伸させ大地を踏みしめる。ヘンベといい、悪霊を封じこめる。

扇を手に、青年2人が舞い、力強くヘンベ(反閑へんばい)を踏む地固めの舞(東栄町足込)。

青年による「市の舞」(豊根村下黒川)榊を手に舞う。

3人の稚子による「花の舞」(豊根村下黒川)採りものも鈴と扇、盆、そして湯桶と変えながら、舞いつづける。

山の神である山見鬼、榊鬼、朝鬼などは、はかりしれない力を秘めた存在だ!

湯ばやし(豊根村下黒川)は、舞のあと、湯たぶさでたぎった釜の湯をかけあい、無病息災、五穀豊饒を願う。

仮面の舞には、翁、弥宜、巫女舞などが演じられる。

問答する翁にも村人のもてなしも、また暖かい。

作 品 名：シリーズ〈民俗芸能の心〉
舞うが如く　翔ぶが如く
—奥三河の花祭り—
(35㎜／カラー33分)
企　　画：㈶ポーラ伝統文化振興財団
製作協力：㈱櫻映画社
監　　修：高橋秀雄

製作スタッフ：製　　作●村山和雄
脚本・監督●大島善助
撮　　影●村山和雄
山屋恵司
撮影助手●田中龍雄
音　　楽●角田　敦
照　　明●水村富雄
編　　集●加納宗子
解　　説●鈴木瑞穂
タイトル●菁 映 社
録　　音●堀内戦治
現　　像●ソニーPCL

協　　力：愛知県
豊根村教育委員会
東栄町花祭り会館
足込花祭保存会
下黒川花祭保存会

Pola Foundation for the Promotion of Traditional Japanese Culture
財団法人 ポーラ伝統文化振興財団
〒141-0031　東京都品川区西五反田2-2-10　ポーラ第2五反田ビル2階
TEL.03-3494-7653　FAX.03-3494-7597

@2,000 03.4